
とあるはがない能力者

ファミリア

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

とあるはがない能力者

【Nコード】

N1883W

【作者名】

ファミリア

【あらすじ】

／ある日、隣人部のメンバーである志熊理科が持ってきた機械でゲームをしようとした瞬間、羽瀬川小鷹を含む隣人部のメンバーは異世界へと飛ばされてしまう。小鷹が行き着いたのは学園都市。他のみんなもこの世界にいるらしい。超能力者に魔術師？ 何なんだその世界……。小鷹は隣人部のみんなと出会えるのか、そして元の世界へ返れるのだろうか。隣人部とあるの世界が交差する時、物語は始まる。／

／これは「とある魔術の禁書目録×僕は友達が少ない」の二次創

作です。文才に乏しい部分や、一人称練習中の為、些か未熟な部分が多いと思いますが、暖かく見守ってやって下さい。／／

プロローグ（前書き）

こんな物を書いてしまいました。
文才には乏しいですが、よろしく願います。

プロローグ

事の始まりは、隣人部の部室に志熊理科が持ってきた変な機械だった。

違う世界に行って友達を作る。と言うものらしいが、実際の所は、仮想の空間を作ってそこにいる住人達と友達になろうと言う、要するにゲームだった。

隣人部の活動は友達を作る事だ。

その為に、まずはゲームの中で友達を作ろうと言う、案だったらしいが、そう言うタイプのゲームは散々部室でやり込んでいるヤツがいるので、正直見飽きていたし、あまりやる気にはなれなかったのだが

「これってあれよね？ ネットワークに繋がってて世界中の人と友達になれるってやつよね？」

と、興味津々に柏崎星奈が訪ねた。

「はいそうです。実はベータテストを頼まれたんです」

志熊理科は機械のセッティングをしながら答える。

ちなみにベータテストと言うのは、

開発中のソフトウェアやネットサービスの発売（あるいは正式公開）直前の版をユーザに提供し、実際に使用してもらって性能や機能、使い勝手などを評価してもらうテスト

の事だ。

もちろん、これは理科に聞いた。

「ふん、くだらん」

部室のソファで本を読んでいた三日月夜空が言った。

「ベータテストと言う事は、ユーザーがほとんどいないのだろう？」

そんなモノをやってもまともな友達などいやしないだろう」

「実は以外にもそうでは無いらしいですよ？ この会社、相当力を入れてるらしく、既にベータテストを日本全国で行ってます。理科が聞いた時では五〇〇〇人くらいでしたが、もっと増えてると思いますよ」

「ま、そんだけいてもあんたと友達になってくれる人なんていないでしょうね」

挑発する様に星奈が言った。

「なんだと肉……」

「要するに、ゲームの中ですら友達を作る自信が無いんでしょ？ だからやらない」

「ふん、ゲームでしか友達を作れないお前に言われたくない」

「あんただって友達いないじゃない」

う、と夜空が詰まった。

「もちろん私にも友達はいないけど、でも、ゲームの中でくらいなら友達くらい作れるわ。あなたと違ってね」

星奈はさらにぐいぐいと押していく。

「でも、あんたには無理よねえ。ゲームの中ですら友達作れないもんねえ」

「……いいだろう。やってやろうじゃないか。そして称えるのだな。肉よりも友達を多く作ってしまったこの私に」

見事に挑発に乗ってしまった夜空は結局ゲームに参加する事になった。なぜか俺も含めて……

まあ、星奈もなんだかんだで夜空をゲームに誘いたかっただけなのかもしれない。まとめて俺も参加すると聞いて、何か星奈が嬉しそうにしている気がする。

「幸村はどうする？」

いつもの様にコーヒーポットの前でポーっとした表情で立っている楠幸村に俺は訪ねた。

今日も執事服も着ている幸村だったが、以前にも増して執事服が

板に付いてきた気がする。少し前まではメイド服だったのだが、正直、偶にはメイド服でもいいかななんて思ってみたりする俺である。

「あにきがやるのでしたら、わたくしも参加しましょう」

「小鳩とマリアはどうする？」

今日は大人しく二人してソファーに並んで座っていた妹の羽瀬川小鳩と隣人部の顧問である高山マリアに尋ねる。

「クックック、このレイシス・ヴィ・フェリシティ・煌がその様な戯事をするとも——」

「ワタシはやるぞお、お兄ちゃん！ そのいんたーねっととか言うヤツでワタシもお兄ちゃんと遊ぶぞー！」

と、マリアはソファーから飛び立つと俺に飛びついてくる。

「マリアは参加、と。小鳩はいいのか？」

「え、あ……」

「なんだ？ うんこ吸血鬼はやらないのか？ そうか、じゃあゲームの中ではワタシがお兄ちゃんの妹になってやるぞー」

「じゃあ、小鳩ちゃん以外は全員参加って事でよろしいです——」

「やるもん！」

勢いよく立ち上がった小鳩はマリアに突っ込んでいく。

「離れるこのアホー！ あんちゃんはゲームの外でも中でもうちのあんちゃんなんじゃ！」

「アホって言うたな！？ アホ言うた方がアホなんやぞー！」

「離れろうんこ！」

「うんこちゃうもん！」

「……あー、じゃあ全員参加って事でいいですね？ 準備しちやいますよ？」

と、理科は着々と準備を進めていった。

と言っても、「バーサルボーイ」の時に使った様なヘルメットとゲームパットを少し大きめの機械に繋いでいくと言う、単純なモノだ。

作業はあっという間に終わったらしく、俺達隣人部のメンバーはそれぞれヘルメットを手にとった。

「ほとんど説明する事なんてないんですが、何か質問とかありますか？」

理科はそう言いながらくると周囲を見る。

それぞれ、特に質問もないらしく首を横に振った。

「そうですか、ちなみに注意ですけど、相手はコンピューターじゃなくて私達と同じユーザーですからね。変な噂が広まったら、友達を作る事は難しくなっちゃうんで、その辺り気を付けてください」

「だそうだ、肉。気をつけるんだな」

「そっくりそのまま返してあげるわよ。ま、精々ワタシよりも沢山の友達を作る事ね」

夜空と星奈の争いが起きそうだったので、俺は理科に頼んでさっさとゲームを起動してもらった。

「おい、何も見えないぞ」

「なにも見えません」

「見えないわよ」

ヘルメットを被ったのはいいが、理科がゲームを起動しても画面は真っ暗のままだった。

まだ起ち上がってないのかと思ったが、実際そうではないらしい。機械の調子が悪いのか、ヘルメットの外から理科の声が聞こえてくる。

「何で起動しないんでしょう？ 接続や組み立てには全く異常が無いですけど、……えい」

コッ、と理科が機械を蹴るような音がした。

と、同時に真っ暗だった場面から光りが映し出され始めた。

「お、動いたみたいですね」

だが、

「おい、これ、何か変じゃないか？」

画面には映像が映し出されているが、グチャグチャだった。

モザイクにも見えるし、色んな色が重なってただ色が広がっているだけ、映像とは言えるモノではなかった。

バグと言うヤツだろうか。まあ、テスト版だから仕方の無い事なのかもしれない。

「一旦止めた方がいいんじゃないかな？」

正直、目に悪い。ヘルメットを被っているので、目の前でそんな光景が広がっているのだ。チカチカして頭が痛くなりそうだ。

しかし誰からの反応もなかった。

「誰か返事くらい――」

俺が言おうとした時、変化があった。

不思議な感覚だった。

地面に足がついているハズなのに、まるで宙に浮いている感じだった。

ふわふわとしているのか、ドロドロとしているのか、水の中にいると言うべきか。俺の知っている言葉では現せない、不思議な感覚。そして、急に空が見えた。

ヘルメットの画像はグチャグチャだったのに、一瞬にしてその視界がクリアになった。

「おいおい、どうなってんだ」

一瞬、ゲームの中に世界かと思ったが、そうではなかった。

地面を触る感触があるのだ。

いくら最新のゲームだからといってヘルメットしかつけていないにも拘らず、ここまでの臨場感は出せないだろう。

そんなハイテクな機能は、俺の知ってる範囲ではまだ存在していない。

もし、これがゲームの世界であるならば、これを作ったゲーム会社はノーベルモノだ。

だったら、ここはどこだ？

さっきまで隣人部の部屋にいたはずだった。

周りには夜空も星奈も幸村も理科も小嶋もマリアもない。俺は

たった一人でどこかのビルの屋上に仰向けになっている。

「どこなんだよ、ここ」

起き上がって周りを見てみたが、同じ様なビルが立ち並び、その間には風力発電用と思われる巨大なプロペラがグルグルと回っている。

更に、このビルの正面には奇妙なビルが建っていた。

奇妙というのはその建物には窓が一つも無い。入り口すら見当たらないその建物は、もはやただの建造物だろう、と疑いたくもなる。「は？」

と、次の瞬間には俺はその建物の中にいた。

「おいおい、何の冗談だよ……ツツコむ所が多すぎて突っ込み切れねえぞ」

俺は混乱していた。

部屋にいたと思えば外、外にいたと思えばまた部屋。それに今度は薄暗い部屋の中に巨大な水槽みたいな物があって、

「驚かせてしまったようだ」

その中に人が逆さまに浮いていた。

俺はなんて答えればいいか少し迷った。

驚かせるといった次元のレベルじゃない。

「心配する事はない。私を初めて見た者は皆同じ様な顔をする」

「そりゃそうだろ、てか、お前は誰？　ここどこだよ？　俺、さっきまで外にいなかったか？　いや、その前は部屋にいたんだっけ……」

「私はアレイスター。この学園都市の総括理事長をしている者だ」

「学園都市？」

「やはり、一から説明するには時間がかかり過ぎる。学習装置でこちらの世界の情報を上書きすれば時間を短縮できるか。この様な事例は正直私も初めてで対処に困る」

「おーい、話が見えねえぞ」

逆さまの男がなにやらブツブツと言っているので俺はとりあえず

ツッコんでみた。

「うむ、では単刀直入に話そう。君はこの世界の人間ではない」
は？

「こちらの四界のバランスが崩れた所為か、そちらの世界で何かバランスが崩れたのか、今の時点では何とも言えないがね。どちらにせよ、こちらの世界のバランスは多少崩れてしまった様だが、それほど深刻な状態ではない」

「ちょっと待った。この世界の人間じゃないって、どう言う事だ？」

「そのままの意味だが？ 異世界の住人と言った方がよいか、君はこの世界に居るはずのない人間だ。この場合『セフィロトの樹』にはどう影響が出るのか少し興味深いが」

「だから、説明の後に独り言を言うの止めてくれ。こっちは徒でさえ混乱してんだ」

いきなり異世界の人間とか言われても、ピンと来ない。

正直訊きたいことは山ほどある。ただ、何から訊けばいいのか頭の中で整理が出来ていない。

「ええっと、俺は別の世界から来たんだよね？ だったら、そっちの世界で俺の近くにいた奴らもこっちに來てゐるって事なのか？」

とにかく、隣人部のメンバーが心配だった。

あの、理科が持ってきたゲームをした直後に俺はこの世界（まだ信じられないが）に來てしまった。

なら、あの時同じ様にゲームをやろうとしていた隣人部のメンバーが、この世界にやゝて來ていてもおかしくは無い。

「その可能性は大いにあり得るだろう。君がこうしてここに來ているのだからね。まあ、この学園都市の中にいるのであれば、直ぐに会う事が出来よう」

「そうか。なら、もう一つ。俺は元の世界に歸れるのか？」

「それは私には分かりかねない。言っただろう、この様な事例は私も初めてなのだよ。ただ、安心したまえ、こちら側にいる限りはで

きる限りの協力はしよう。ここは学園都市。人口の八割は学生諸君だ。君が一人紛れ込んだ所で何も問題はない。無論、君の仲間もだ」さてさて、初対面の人間をこれほど信用しても良いのか正直疑問な所ではあるが、俺にはこの世界では頼れる人がいない。

まあ、元の世界でも多くはなかったけど、って

自分で言っただけ寂しいなあ……

「ああ、ならあいつ等の事が分かったら教えてもらったりできるのか？」

「そちらに連絡しよう」

と、なにやら天井の辺りからぶら下がっているモニターがピコピコと点滅した。

「うむ、どうやら客人が来たようだ。悪いがそろそろお開きにする事でしょう」

「いや、まだ分からない事が一杯あるんだけど……」

「それについては、学習装置テストメントで知識を上書きする事にした。既に下の者には用意をさせてある」

「知識を上書き？　そんなバカな」

「君のいた世界ではどうだったか知らないが、この世界ではそんな事すら出来てしまうのだよ。知識を上書きしてしまえばある程度、この学園都市に関する情報が分かる事だろう」

逆さ向きの男がそう言っている間に、一人の女の子がやって来た。学校の制服みたいだが、上半身は下着の変わりに包帯を巻いてその上からブレザーをかけているだけと言う格好だ。

いや、下着の変わりに包帯とか……それはちよつと反則だろ。

それはそれで、何かエロいような気もする。

女の子は特に何も言う事無く俺に近づいて来た。

で、気が付いたら別の部屋にいた。

何なんだ。これは……

摩訶不思議現象に咂然とするまま、俺はその部屋の中にいた男に言われるまま変な機械を使わされて、何かをやらされた。

その間、女の子は部屋の端で腕を組んで壁にもたれ掛かっていたが、男が何か合図すると、再び俺の元へやって来て。

また、移動した。

どうやら、これは空間移動テレポートと言うらしい。

って、何だこの頭は??

知らないはずの知識が頭の中を駆け巡っている。

学園都市、超能力者、風紀委員、ジャッジメント、アンチスキル警備員

知らない単語が、知識として定着していた。

何だよこれ……

「こんなのあったら勉強する必要なんてないじゃん」

と、言う訳で、俺は異世界へとやって来てしまった。

キャラクター設定（前書き）

ネタばれしない程度にキャラの紹介です。

能力名は出しますが、実際にどういう能力かなのは、出てきてからのお楽しみです。

名前で大体分かってしまうもののあるかもしれませんが

キャラクター設定

とあるの世界での隣人部のメンバー紹介

・羽瀬川小鷹
はせがわ こたか

本来であるなら聖クロニカ学園高等部二年五組。とあるの世界へ迷い込んだ後、アレイスターの計らいで学習装置テストメントを使用してこの世界に関する知識や学園都市の知識をある程度上書きされた。

・能力Ⅱ『理想御手』
ドリームアッパー

友達を作りたいと願う小鷹に備わった能力。しかし、実際その能力では友達は作れない。

【元ネタ】dream upⅡ「作り出す」

・三日月夜空
みかづき よぞら

本来であるなら聖クロニカ学園高等部二年五組。中性的な美貌の持ち主で、隣人部の創設者。

理科のゲームによってとあるの世界に迷い込んでいる。

・能力Ⅱ『最善一手』
シングルセレクト

百人の友達よりも、百人分大切に出来るたった一人の友達を作る、と言う夜空の想いから備わった能力。ただ、それによって友達を作る事はできない。

【元ネタ】singleⅡ「たった一つ」selectⅡ「(多くの中から)選ぶ」

・柏崎星奈
かしわざき せな

本来なら聖クロニカ学園高等部二年三組。金髪碧眼、巨乳、容姿端麗、成績優秀、スポーツ万能と揃った完璧超人だが、性格は極度のナルシシスト。

夜空同様、とあるの世界に迷い込んでいる。

・能力Ⅱ『女王物質』
リリーサフェロモン

彼女の性格から反映された能力。主に男子に対して絶大な効力を発揮するが、同姓に対してはそれほど大きな効力を得られない。もちろん、それによって友達を作る事はできない。

【元ネタ】フェロモン

・楠幸村
くすのき ゆきむら

聖クロニカ学園高等部一年一組。名前に相応しい「しんのおこと」を目標に努力している女の子。普段の服装は執事服またはメイド服。メンバー同様、とあるの世界に迷い込んでいる。

・能力Ⅱ『曖昧模糊』
フアジーロジック

【元ネタ】fuzzy logicⅡ「曖昧論理」

・志熊理科
しぐま りか

聖クロニカ学園高等部一年生。通常授業の免除という超高等遇を受けている天才少女。黒髪を後ろで結えたポニーテールと眼鏡で普段は常に白衣を着ている。

メンバー同様とあるの世界に迷い込んでいる。（自分の持つべき機械が原因かもしれない）

・能力Ⅱ『能力確認』
キャパシティチェッカー

【元ネタ】capacityⅡ「能力」 checkⅡ「確認」
ポイズンチェッカー。

・羽瀬川小鳩
はせがわ こばと

聖クロニカ学園中等部二年生。小鷹の妹。色白で金髪碧眼。普段から自分の中で設定したキャラ「レイシス・ヴィ・フェリシテイ・煌」になりきってゴスロリファッションをし、右目には赤のカラーコンタクトを入れてオッドアイにしている。

メンバー同様とあるの世界に迷い込んでいる。

・能力Ⅱ『設定変更』
コスチュームプレイ

【元ネタ】コスプレ

・高山^{たかまや}マリア

聖クロニカ学園に勤務するシスター。銀髪碧眼を持つ一〇才の幼女で、隣人部の顧問でもある。

勉強面では飛び級できるほどに優秀だが、他の分野は年相応かそれ以下で夜空に良く騙されている。

・能力Ⅱ『^{リアリゼーション}虚言捏造』

【元ネタ】realizationⅡ「具現」

キャラクター設定（後書き）

感想等ありましたら、よろしく願います

電撃少女

さて、本来であるならば聖クロニカ学園二年五組に在籍しているはずの俺、羽瀬川小鷹だが、現在はどうした事か学園都市にいる。

人口二三〇万人。その八割が学生であり、超能力を扱う能力者だ。ここ学園都市では時間割りの一環で脳の解発を行っているらしく、その時間割りを受けた学生は能力者になれるらしい。

能力の強度は無能力者から超能力者までの六段階。その内六割の学生が無能力者に分類されていて、その頂点とも言える超能力者はたった七人しか存在していない。

これらの事は、全て俺の知識の中にある一部だ。

そう。あの変な機械が何かで俺の頭の中に知識を植え込んだそれ以降、俺は初めからこの街に暮らしているのではないかと錯覚させるほど、この街について知っていた。

分かってはいるが、自分でも変な感じがする。

まあ、根本的な部分として、違う世界に迷い込んでしまった事や、隣人部のみんなの事など心配しなくてはならない事がいくつかあったが、

「で、あんたも何か用な訳？」

とにかく、今は目の前の事態に集中した方が良さそうだった。

「慣れない事はするもんじゃないな……」

目の前には、俺の情報（上書きされた知識）から、常盤台中学の制服を着た少女がいた。短髪のおまけに能力者らしく、髪の手前からバチバチと火花が散っている。

フと立ち寄ったコンビニの帰り、不良に絡まれている女の子を助けようとしたのが運のつきだったみたいだ。

その女の子は、助けに入ろうとした俺ごとまとめて電気で焼こうとした。

電線でも切れたんじゃないか、と思うほどバチバチと電気が散っ

て、男達は一瞬にしてカエルみたいに地面に倒れてヒクヒクしている。

ほんと、慣れない事はするもんじゃない。

星奈とプールに行ったときに不良に絡まれた星奈を助けた記憶が、そんな行動を取らせてしまったのかもしれない。

「私の電撃くらって立ってるって事は、あんたも能力者、か」

「そう言う事にしといてくれ」

なんか、常にバチバチ言ってるので、通称電撃少女にしよう。

その電撃少女は、ん？ と少し首を傾げると、

「でも、あんたも物好きね。今時不良に絡まれる少女を助けるヒーローなんて流行らないわよ」

「今回は偶々だよ」

「ふうん。偶々ねえ」

って言うか、この品の無い素振りはなんだ？

確か、常盤台中学ってのはお嬢様学校って情報があるんだが、お嬢様にはほど遠い。

わがまま娘と言うか、なんと言うか、お嬢様のイメージが崩れる。

「……聞こえてるわよ」

「はい？」

「思ってる事が口から出てるって事」

「あ、またなってたのか」

「て言うか、何？ お嬢様のイメージが崩れる？ あんたはお嬢様にどんな期待をしてる訳？」

んーと考えようとして、思い浮かんできたのが、夜空や星奈、理科や幸村と言った隣人部のメンバーだけだったので、俺は意向を一度ストップさせた。

「んー。お嬢様の明確なイメージは……分かん。でも、まあもつとお淑やかな感じかな」

「お淑やかじゃなくて、悪かったわねえ！」

電撃少女が叫んだ瞬間、閃光が走った。

電撃の槍と言った方がいいかもしれない。

一体何ボルトの電圧があるのか想像も出来ない電撃。浴びれば地面で伸びている不良達と同じ末路を辿る事になるだろう。

何もしなければの話しだが。

バシュ！ と俺の目の前で電撃が弾け飛んだ。

壁にぶち当たった様に、電撃の槍は消滅する。

「眉一つ動かさないなんて、ほんといい度胸ね。最っ高にムカつくわ」

と、電撃少女は叫んでいるが、実際のところ、俺の心臓はバクバクだった。

うまく行かなければ、今頃はあの不良達と同じ様に地面でお休みしている所だったからだ。

この学園都市に来てから、上書きされた情報以外にもう一つ分かった事がある。

「私の雷撃をそんな風に防ぐなんて、一体何の能力よ、それ」
俺にも能力があったのだ。

それも、とても変わった能力。

「さあ？ 俺にもよく分からん」

「はあ？ 分かんないって、あんたねえ、とことん私をバカにしてるわね」

どんどん機嫌が悪くなっていく電撃少女。機嫌が悪くなると、辺りに電気を撒き散らす癖があるのかもしれない。

ただ、自分でもよく分かっている能力を説明できる訳もない。

増して、バカ正直に異世界から来ましたなんて事は言えないので、さてさてどうしたものか。

「んー。よし、逃げよう」

俺は突然逆方向に走りだした。

「ちょ、待ちなさいよ！」

やはり、電撃少女は追いかけて来るが、その辺りは準備は万全だ。ゴン！ と鈍い音が俺の耳に入ってきた。

うわぁ、痛そう……。

よく、鳩がガラスにぶつかる様な事があると思うが、それに似たような事が後方で起こっているハズだ。

「痛い。ちよっと何よこれ！？ 見えない壁？」

案の定、電撃少女が顔をぶつけたと思わせる声が聞こえてきた。後ろを振り向くと、電撃少女は額の辺りを押さえて膝を付いていた。

それだけ確認すると俺は走る速度を上げた。見る見るうちに電撃少女との距離が開いて、角を幾度と曲がり、住宅街が近づいてきた。俺はこの学生ではないが、総括理事長の計らいで学生寮の一室を与えられている。おまけに、学校にも在籍している事になっている。

裏口転校ってやつだ。

その部屋は第七学区の学生寮の一角の七階部分にある。

「さて、一応もう一度練習をかねて、ショートカットでもするか」
七階までの距離は大凡一七メートルと言った所か。

意外に高い。

理想は部屋の前までも最短ルート。

階段あたりで十分か。

そして、俺は何も見えない空中へと一歩足を踏み出す。

トン、とそこに感触があった。コンクリートの様な硬い感触。

また一歩、一歩と踏み出して行くと、何もない空中を歩いて登っていく。

空中歩行。

の様に見えるが、俺は立派な階段を登っているだけだ。

俺の作り出した見えない階段。

いいぞ、感覚がよく分かってきた。

ただ、予想以上に高いので、高所恐怖症じゃなくてよかったと今更思う。

七階にたどり着けば、目の前は俺の部屋。

そして、学園都市での一日が終わっていった。

＊＊

俺の能力は多分、理想のモノを作り出す能力、だと思う。

そこに見えない壁があればいいと思えば、そこに壁を作れる。階段があればいいと思えば、階段だって作れる。

まだまだ未知数な能力だが、俺の情報からしてもこんな能力はこの学園都市でも珍しい。

何か特別みたいでうれしいかも……

ちなみに、

電撃少女が学園都市に七人しかいない超能力者の第三位、常盤台中学の超電磁砲^{レールガン}、御坂美琴と言う事は知ったのは数日後であった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1883w/>

とあるはがない能力者

2011年9月11日03時23分発行